

サハ共和国・ヤクーツクだより ⑩

杉嶋俊夫

こうして連載を続けているとそれなりに反響があって、嬉しく思います。今回は主に、今までに寄せられた感想や質問にお答えする形で書いてみたいと思います。

◆食べ物について

私は寮で生活していたので一般家庭の食卓を覗く機会はほとんどありませんでした。(元)同僚の話や、スーパーに並んでいた食材・お惣菜を見た印象では、他のロシアの都市とほとんど違いはなく、普段はロシア料理を食べているようです。ヤクーツクで今では主食となっているパンはロシア人が持ち込んだもので、豚・鶏を食べるようになったのも生活様式がロシア化してからのことらしいです。それ以前は肉といえば馬肉・牛肉だったようです。

ちなみに、私がよくお世話になった北東連邦大学の食堂のメニューは大雑把に言うと、スープ、パン、サラダ、肉類(ローストチキンやハンバーグの類)、菓子(ケーキ・クッキー類)、紅茶・コーヒー。他のシベリアやロシア西部の大学食堂のメニューと全く同じでした。

“日本食レストラン”についても少し触れておきます。ヤクーツク市内に五軒ぐらいあります(写真1・4)。私が入ったのは(写真4)のほうです。どの店もメニューは似たりよったりで、一応日本語の名称はついていても“本物”とはかけ離れた料理が多いようです。一番人気があるのはやはり寿司。といっても、大半はアメリカで発明されたロール寿司(巻き寿司)で、私は苦手なので食べませんでした。私が注文した親子丼は日本とほぼ同じ味付けで、おいしかったです。

◆気温について

滞在中の気温について書きます。3月中旬の気温はマイナス15度前後、4月中旬は0度前後、4月下旬にプラスに転じ、メーデー(5月1日)は15度近くまで上がりパレードに参加しているうちにうっすらと汗をかくほどでしたが(写真2)、その後2か月間、気温はかなり激しく上下を繰り返しながら上昇していきました。「異常気象」は、ユーラシアの東の端でも激しさを増してきているようです。



1 日本料理店 YAMAMOTO 日本テレビ番組でも取り上げられた日本料理店。この写真では見づらいますが「幸運」、「人生」、「食欲」、「富」と書かれています。日本人の目で見るとあまり味わいのない字体で・・・。



2 学生の浴衣をなおす教師たち 5月1日のメーデーのパレードが出発する前に一枚撮らせてもらいました。この日は、昼過ぎに気温が15度ぐらいまで上がりました。

◆大学の(元)同僚達

・・・まだ全く触れていませんでしたね。“幸い”、8割以上が女性、しかも、私よりも年下でした・・・。陽気で元気な人ばかりで、みな親切にしてくれました。大学の教員・職員はロシア人よりもサハ人の割

合が圧倒的に高く、私がお世話になった東洋諸言語学科も全員サハ人でした。教員は大学院に入って学術研究を行うのが一般的で、昨年も2名、日本語教員が修士号を取りました(写真3)(厳密に言うと、日本の「修士号」よりもレベルは高いです)。

サハは早く結婚するカップルが多く、元同僚たちもその多くが子育てに追われています。出産後3年間は十分な育児手当をもらって仕事を休むことができるそうですが、実際は3年待たずに復帰する女性も珍しくないとか。子育て・授業・研究の3つをこなす努力とバイタリティには唯々頭が下がります。

◆ ヤクーツクの姉妹都市

1990年代に山形県の村山市がヤクーツク市と協定を結びました。交流が弱まった時期もあったそうですが、数年前、北東連邦大学にいらした日本人教師のかたの尽力により、また活発になりつつあるようです(写真4)。

本当に時が経つのは早いもので、私がヤクーツクに赴任した日からちょうど1年が過ぎました。私の滞在期間はたかだか4か月ですし、バランスのとれたヤクーツク市の紹介ができたとは思っていません。サハ共和国やシベリアに興味を持っていただくためのきっかけ作り程度の役割が果たせればよいと思って今まで書かせていただきました。もう少し、書き足りなかった点を補足して、おそらく次回で最終回とさせていただくことになると思います。



3 修士号の授与を祝うパーティー ヤクーツクでは、修士論文の公開審査にパスしても、正式に修士号が与えられるまで何か月もかかるそうです。この日は、日本語教師2名と中国語教師1名にようやく与えられ、皆で祝いました。



4 寿司バーの「むらやま写真展」 私が入った市内の日本料理店FUJIYAMA。出入り口に、ヤクーツクの姉妹都市、村山市の自然や伝統行事の写真がたくさん貼ってありました。

杉嶋俊夫：東京都町田市生まれ。千葉大学卒。大学で認知心理学を専攻、途中で言語学に転向、シベリア先住民の言語を学ぶ。院在籍時に西シベリア・トムスクの大学に留学したことがきっかけで、トムスク市やロシア西部・リャザン市にある大学で日本語を教える。今回の派遣も、リャザン大学の時と同じ日露青年交流センターの派遣プログラムによる。